

レスリング部創部 50 周年記念祝賀会 冒頭挨拶 2017.01.28

(司会者の松永二三男アナウンサー：1988年ソウル・オリンピック・レスリング実況・元日本テレビアナウンサーから、先日のマスターズ大会の準優勝のことや、哲学者プラトンや「運命」の話にまで言及されて、私のことが詳しく紹介されてしまったので、自己紹介の必要がなくなった！)

本日はお忙しいところ、青山学院大学レスリング部創部 50 周年の記念祝賀会にご出席頂きまして、誠にありがとうございます。今年度から部長を務めています入不二です。

個人の人生で 50 年と言いますと、それまでの経験が「顔」に現れ定着してくる年齢でしょう。ちなみに私は 58 歳です。レスリング部の 50 年もまた、そのような「顔としての伝統」が定着してくるのに十分な年月でしょう。

OB の一人に、プロレスラーの中邑真輔氏がいます。アメリカの WWE という世界最大のプロレス団体でいま活躍中です。プロレスに詳しくない方のために注釈を加えますと、野球で言うならば、メジャーリーグから請われてオファーを受け本場で成功していることに相当します。大変な偉業です。中邑真輔氏は、あの偉大なるアントニオ猪木氏の「呪縛」を脱して、その独自のシンスケ・スタイルを創り上げていくことで、世界へと飛躍していきました。

もう一人、OB であり、現在ヘッドコーチを務める長谷川恒平氏は、皆様ご存じのように、ロンドンオリンピックの日本代表選手であり、その他にも輝かしい実績を残しています。ですから、大学に進学する時点で、青学ではなくて他のレスリング強豪校を選択する道もお誘いもあったと思います。しかし、長谷川コーチのご自身の弁によりますと、「自分で自分のレスリングスタイルを創っていける自由度が大きかったからこそ、青学のレスリング部を選択した」そうです。

この代表的な OB お二人に共通しているのは、「自分で自分のスタイルを自由に創り上げる」という点です。

そして、奇しくも昨年 12 月になりますが、私の研究室でレスリング部の或る学生と面談をしたときに、「どうして青学のレスリング部を選んだの？」と訊ねたところ、これと同様の言葉「自分で自分のレスリングスタイルを創ってきたいので、青学のレスリング部を選びました」という発言を直接聞きました。

「自分固有のスタイルの自由な創造」は、もうこのレスリング部の「伝統」になりつつあると言ってもいいのではないのでしょうか。

そして、もう一つ、伝統になりつつあるものを加えておきたいと思います。それは、「異質なものを包み込めるしなやかさ」です。

私は、司会者の紹介にもありましたように、51歳でレスリングを始めた「初老の現役レスラー」です。しかし考えてみてください、こんな素人に近い年寄りが、バリバリの学生達にまじって一緒に練習することは、そうとうに異質なものの混入です。にもかかわらず、このレスリング部は私を受け入れてくれます。これは、太田浩史監督の寛容さとやさしさと度量の大きさがあってこそ、はじめて成立したことなのです。

「異質なものを包み込む」というのは、何も私のことだけではありません。レスリング部の練習の中では、私の知る範囲だけでも、イラン人の方々、パオオからのレスリング留学生、(私の知り合いでもあるのですが)キルギス出身のレスラー、他のジャンルの格闘家などを見かけることがよくあります。国や文化や言葉やジャンルを超えた「異質なもの」たちを歓待し、違いなど易々と超えて、一緒にレスリングを楽しんでいる学生たちの姿の「しなやかさ」を見るのは、とても素敵なことです。

この二つ、「自分固有のスタイルの自由な創造」と「異質なものを包み込めるしなやかさ」は、これからも受け継がれていって欲しいと思う「伝統」です。

50周年の次は100周年ということになるでしょうが、私を含めまして会場の多くの方々は、その100周年に立ち会うことは年齢的に不可能でしょう。しかし逆に、会場の後ろの方にいる若い方々は、その100周年にも確実に立ち会うことができます。そういう個人の生を超えた「新陳代謝」を通じて現れ続けていくものが、「伝統」なのでしょう。

みなさま、今後とも、青山学院大学レスリング部の応援とご指導ご鞭撻を、どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

(司会者の松永アナウンサーからは、若干哲学の授業のような挨拶でしたと、また100周年に行く前に60周年は入不二部長の定年の年だとコメントされてしまった!)